

## 芹沢光治良と天理教 — 中山正善との交流を中心に —

資料中、人名の敬称はすべて略させていただきます。ご了承ください。

自伝的小説『人間の運命』で知られる芹沢光治良は、その父が天理教に入信し、無所有の布教生活に入ったため、苦勞の多い幼少期を送ることになりました。その後、作家として大成した昭和23年に、「天理教」から天理教祖の伝記を「天理時報」に連載する依頼を受けました。しかし、資料提供はなく、独自に資料を探す中で、「天理教」の人々と接することになり、二代真柱中山正善とも知り合います。この辺の状況は『教祖様 再版』の「再版のいきさつ」、『死の扉の前で』『人間の運命』に書かれています。ただ、『死の扉の前で』『人間の運命』は小説として書かれているので、創作がかなり入っていると思わなければならないでしょう。それを踏まえつつ、芹沢光治良の描く天理教の内情を考えてみたいと思います。



ウィキペディアより60歳頃

『ウィキペディア (Wikipedia)』より (※文章の配置等を修正しています)

芹沢 光治良《せりざわ こうじろう、1896年(明治29年)-1993年(平成5年)》、小説家。静岡県駿東郡楊原村大字我入道(現在の沼津市我入道)に父・常蔵(後に常晴と改名)、母・はるの子として生まれる。生家は網元。1900年 父が天理教に入信し無所有の伝道生活に入ったため、叔父夫婦と祖父母に育てられる。世話になった叔父の家も後に天理教会となる。1915年沼津中学校(現・静岡県立沼津東高等学校)卒業後、沼津町立男子小学校の代用教員となる。1919年第一高等学校仏法科卒業。一高在学中、肋膜炎と胃弱に悩み、天理教信者に連れられ、兵庫県三木市の井出国子を訪ねる。1921年高等文官試験行政科に合格。1922年東京帝国大学経済学部卒業、農商務省に入省。1925年農商務省を辞任しソルボンヌ大学に入学、金融社会学のシミアン教授に学ぶ。フランス滞在中に結核に冒され療養につとめる。仏留学後、『ブルジョア』で出発。『巴里に死す』で注目された。作品は父性希求、天理教を主題にしたもの、日本と西洋の対比やその矛盾を追究するものの系列があり、冷徹な目を据えながら、生と死、愛の問題を扱った主知的ヒューマニズム作家。日本よりもむしろ海外(特にフランス)で高い評価を受け、後年しばしばノーベル文学賞候補と噂された。 1965年 - 1974年日本ペンクラブ会長。日本芸術院会員。

「芹沢光治良文学愛好会」のHPに芹沢光治良の兄弟のことが出ています。これを読むと、芹沢家の人々はほとんどが天理教と関わりを持っていて、天理教に批判的だった長男真一（『人間の運命』の中では「一郎」）は、第二教祖と呼ばれた井出くにの信仰に入り、次男光治良（『人間の運命』の中では「次郎」）もその小説に描かれているように終生天理教の周辺で生きることになりました。

【芹沢光治良文学愛好会. 2016年09月13日記事より】

芹沢光治良氏は、宗教的作家と言えます。前回でも書きましたが、江戸末期に大和丹波市の中山みき（1798～1887）が始めた天理教が、芹沢氏が生まれる前の明治初期に静岡の沼津市まで布教されて来ていました。父芹沢常蔵（のち常晴）は、クリスチャン江原素六の集成舎に入学させてもらえず、村の道生舎や寺の住職に学び村役場に勤めていた時に同僚に誘われて天理教に入信します。宣教所の許可が出なくて、次男光治良が3（4？）歳の時、父母は中山みき教祖の雛形の道に倣い、財産を処分して天理教の宣教師となって家を出て行きました。その決意が光治良の池に落ちての蘇生にあったことが、大河小説『人間の運命』の第1巻・序章『次郎の生いたち』に創作されています。しかし、祖母に懐いていた光治良は実家に残して、長男真一、三男亀太郎は連れて行ったのです。突然に両親が居なくなり、祖父からは不満をぶつけられた光治良は、親から捨てられたという深い心の傷を負います。両親や他の兄弟は極貧の生活で、祖父母の家に残った光治良の方が恵まれていたとも言われています。

しかし、芹沢家の人々は天理教を受け入れ、光治良も幼少期を祖母の信仰の中で育てられます。楊原分教会の二代会長は父の叔父吉蔵、三代会長は父の弟長吉が務めました。光治良の伯母稲葉まきは香貫分教会を設立し、叔母仁藤とみは高富士分教会の初代会長となったのです。光治良の弟亀太郎が父親を継ぎ岳東大教会理事となり、妹喜久は陽東分教会長、弟清は岳治分教会長、末弟茂は天理大学教授となったのです。兄真一と光治良は、叔母とみの夫で海軍軍人仁藤金作から経済的な援助を受けて、一高・東大に進学出来たのです。二人とも天理教に批判的で、一高時代に天理教から離れます。兄真一は朝日新聞・共同通信の記者となりましたが、二代目教祖と言われた井出クニ（国子）の播州の朝日神社の信仰に生きます。弟（六男）武夫は小山家の養子となり、中日新聞の記者から、中日ドラゴンズオーナーとなったことは広く知られています。

この文は光治良の兄真一が語る大正7年頃の話です。明治41年に一派独立した後、天理教は変わっていく、若いころのそれと違うと感じても、時代が変われば教えも変わるんだと思って信仰しているという内容です。これは光治良の父だけではなく、天理教内の人に共通した違和感だったのではないのでしょうか。それゆえ、30年祭にはもう一度神が出現するという期待が生まれたのです。それが二代目教祖とされる井出くにでした。

「親爺に天理教のことを聞いてみたんだ。初めて、真面目に話をきいたんだが……親爺なんか、その信仰に生涯を捧げているけれど、教団のことは、ほんとうは、なにも知らないようだ。天理教が神道から独立したのは、明治四十一年の末頃だそうだが、それまで十年ばかり、教団ではさかんに政府に向かって独立運動をしたようだ。もちろん、親爺なんかは、内務省から一派独立が認可になってから、はじめて知ったのだが、その認可があって、布教をするのがらくになったことを、神がおもてに現われたというふうに、考えているようだ。そして、認可請願するために、政府のよろこぶようにつくって提出した教典が、天理教の教えであるとして、信徒に強制したらしいんだ。だから、明治四十年前後から、天理教もうんと変わったんだ。親爺なんか、若いときいた教えとは、ちがうかと、迷うこともあったらしいが、時代が変わったから教えも変らなければならないと、考えなおして、信仰しているようだ。それなら以前に、教典のようなものはないかきいてみたが、教祖の書きのこしたお筆先とかいうものがあるが、それは信者の目にふれないものだけれど、内証に写して、読んでいる人もあって、親爺も見せてもらったことがあるが、和歌のようで、ただ読んだだけでは、理解しにくいと言うんだ……だが、さっきのお婆さんだがね、神がかりになってからの苦悩、疑惑、迫害など、いろいろ近所の人も話していたが、僕が小さい時に聞いた教祖の苦勞そっくりなんだ。そのお婆さんが、面白いことを言うんだよ、神さんが自分のように、とるに足りない人間におりて、世界を助けたいと、毎日毎晩せきこんで、仰せに従わないと、幾日でも目が見えなくなったり、口がきけなくなったりして、どうにもならないから、神さんの言うなりになろうと決心したら、鍛冶屋をしている旦那が反対で……さんざん苦勞したけれど、その神さんがどんな神さんかと、名前を神さんにきいたところ、天理王命という評判のわるい天理教の神さんだと知って、私は悲しみましたよ。どうせおりるなら、ちがった神さんの方がよかったと思ってね。でも、この世を創り、人間を創ったのは、ただこの神さんだけだと言うのやから、どうにもなりません—僕も思わずふき出したがね。そんなわけで、三十年祭に神がおもてに現われるというのは、どういう意味か。天理教は、発表されている教典による今の信仰が、ほんとうの信仰ではなくて、発表されていないお筆先、その他、教祖ののこしたもののの上に、ほんとうの信仰がつけられるべきではないかとか。**二代目教祖というお婆さんが現われた**というの、どんな意味かとか—いろいろな点から、天理教を研究しても、面白いかも知れんよ。興味を持ったね」（『人間の運命』文庫版2. P230）

ここには、長男一郎が「豚のような悲惨な暮らしのなかで大きくな」り、それを耐えられたのは、「三十年祭には神がおもてに現われて、善人と悪人とをよりわけて審判する」ことを信じていたからで、それゆえ、二代目教祖が現れたと聞いて、その人井出くにを訪ねたことが書かれています。

「ね、僕はもう信仰問題には興味ありませんよ。天理教を卒業しろと言ったのは、一郎さんじゃないか」

「まあ聞け、僕も天理教は卒業したつもりだ、信仰問題に興味もないさ。ただ、親爺が一生をかけてしたことには、無関心ではおれないからね。特に、祖先から代々受けついで地位や財産をかなぐりすてて、しかも、近親者をたくさん悲惨におとしても、悔恨なく、生きていられることの原因は、いつか解明しないではいけないからね……君は我人道にいたから識らないかも知れないが、僕は豚のような悲惨な暮らしのなかで大きくなった。食べる物がなくて、駅弁の食べ残りを集めたものを買って来て、おかゆのように煮て飢えをしのいだ。おとし紙をつくる紙屑の埃と黴菌(ばいきん)を浴びて、足をのぼして寝る場所もなかった。親爺は僕達の暮らしに無頓着で、神の使命により人を助けるのだとあって、いつも家にいなかった。僕達は学校へ行っても、服装がわるいために、よそもののように、毛嫌いされ、侮蔑された。物心ついてから子供らしく遊んだ記憶もないほど、おふくろを手伝い、家のために内職をした。こんな悲惨ななかで、童心を支え、卑屈にならずに、大きく胸をはって生きていられたのは、子供にも理解できる一つの信念があったからだよ……三十年祭には神がおもてに現われて、善人と悪人とをよりわけて審判するってことだった—そうよく聞かされたものだ。善人は信仰する人、悪人は信仰しない人だが、三十年祭になれば、善人は神から感謝されて、ほんとうに至福な生活ができるって、……君はそんな記憶はないか」

「あるとも。僕もてんりゅうさんの子だといって、いじめられた時など、此奴は神さんがおもてに現われた時、きっと悪人として罰せられるだろう、気の毒だ—なんて、生意気に考えたもの」

「そうだろう？ その、三十年祭に神がおもてに現われるという信仰、信念は、いつ頃からか聞かれなくなったが……それに気がつかなかっただけけれど、僕の心が天理教からはなれたので、天理教の話が耳にはいらなかったからだろうね。しかし、三十年祭といえ、教祖が明治二十年に死んだから、大体おとしではないか。神がおもてに現われるというのは、どんな形式をとるか、知らんが、教祖自身—神がおもてに現われて、よろずいさいを説ききかすと言ったのだから、三十年祭に神が現われるというのも、教祖のような人が出て、神の話をするというのではないかね。ところが、二代目教祖が現われたと、教祖の曾孫が話したということを聞いて、僕は紙屑の山の陰にしゃがんで、飢えに涙を流しながら待望した少年の日の神を、ふと想ったんだよ。それで、福井屋の主人について、その人を訪ねたが、それが田舎でね」(『人間の運命』文庫版2. P226)

「みきと本席亡き後、天理教組織は変質した」と『天理の霊能者』は記しています。確かに明治40年に本席が没し、翌41年に一派独立し、大正3年に初代管長中山新治郎が亡くなり、翌4年に管長摂行者に山澤為造が就任します。その間の天理教の変質は大きなものがあり、そこに二代目教祖誕生への期待が高まり、井出くにが出現したのです。

神の天啓を受けた者が、天理教の本部に現れることは、実は中山みきが予言していたことでもあったとされる。

世界の救済プログラムを用意していたみきは、自分の存命中それが不可能であることを知り、自分が現身を隠してから、三十年後（天理教祖三十年祭＝大正五年）におぢば（天理教本部）に再び現れることを予言していたという（芹沢真一『神様のこと』）。

クニは神から命じられるままに、三十年祭のときに教会本部に現れ、自分こそ、みきの再来であると主張した。それはみきの予言を成就するためであったという。／ 天理教本部側は、神の人類に対する教えは、みきとその後継者の本席・飯降伊蔵で完結しているという立場をとっており、そのため、本部はクニを強制的に排除したのである。

クニを神の啓示者であり、真の救世主として認めた者もいた。社会思想家で天理教研究家でもあった大平良平である。彼は自分の機関誌『新宗教』で、**みきと本席亡き後、天理教組織は変質した**ため、神はそれを是正させるべくクニを出現させたとし、**クニを天理教という宗教の枠を超えた救世主と位置づけて喧伝した**。クニがみきの後身として現れることは、ほかならぬみきが在世時に予言していたことであるとも強く主張していた。

天理教本部側は『新宗教』の影響を恐れて、大平を徹底的に批判する一方、同書を買占めるなどの対抗措置をとった。その後、大平が急死したこともあって、クニについてはもとより、初期の天理教の貴重な情報を記した『新宗教』は研究者でも眼にすることができない幻の雑誌となった（最近復刻版が刊行）。**井出クニの名は対外的にはその後、芹沢良一・光治良兄弟が登場するまで事実上、封印されることになった**のである。（『天理の霊能者－中山みきと神人群像』P124. 豊嶋泰國. 1999. インフォメーション出版局）

彼女は身分の上下に因って待遇を異にしない。又敵味方の故を以て愛を異にしない。何んなものも皆一様に待遇する彼女は朝起きても神前に手を合せるといふことはない。只太陽に向かって人民大切に願いますと一言心の中で願う丈である。それで彼女は人民大切に我が生命であると言つてゐる。（『新宗教』大正5年6月号.P15. 大平良平）

朝日神社の祭典日六日には現在も数十人の人が集まるそうです。献金を求めない、みな平等に待遇することが存続のポイントのようです。井出くのにの葬式が地元の人々による仏式だったというのも、地元民にも愛されていたということでしょうか。

あの、天理教の二代目教祖として、一部の人々からあがめられたお婆さんは、六日の祭りの日に、各地から集まったたくさんの信者（助けてもらった人々）が、何か神らしい奇蹟が起きるものと期待するなかで、息を引きとり、二日目に、仏式で葬式をすませたとのことであった。天理教のような大きな教会は、一年近く前から、お婆さんの発意で、宗教法人の手續をとり、朝日神社と名づけて、存続すると、一郎は話した。朝日神社というのに、神式でなくて、仏式で葬式をしたことに、次郎は一寸不審をいただいたが、一郎の話では、葬式の当日、村の習慣に従って老人達が集まって、霊前で御詠歌をうたいはじめたので、信者達はあわてて、総代を選んで村の古老に交渉させて、先ず信者が祭典の時に神前にささげるみ神楽歌を、霊前で合唱したあと、すべてを村の人々に委せることにしたので、仏式になったとのことであった。遺体は特別許可によって一キロ半ばかり離れた山ふところに御陵のようにつくられた処へ埋葬したが、信者の多くは埋葬かすんでも、何事も起きなかったことに、軽く失望したらしかった—（『人間の運命』文庫7.P470）

大正五年 天理教祖三十年祭にお教祖にたのまれ、三十年祭に神が表に現れると申して五百万信徒を楽しましてあるのやから三日なり五日なり本部の神前に神の姿を現して頂かねばわしが言った事嘘になる故是非御苦労して頂きたいと申して頼まれるので本部へ御苦労になりましたのに、本部の役員達きちがい扱いして廊下を引ずり傷をあわして丹波市の警察へ訴えたので、こんな恐ろしい処に居れん播州にて世界の助けをすると仰せになりましてお帰りなされました、／ その時の親様の御歌

日々に 教祖の帰りまちかねて 帰れば分らん思えばふびんや

いでたちきたる古里へ むかいにきたか真心で また立ち帰るしんの火柱

教祖お生家三味田前川家に二通残して御主人の迎えをへてお帰りになりました。（『誠一こころ』P5.朝日神社私家版.2021）

次に、なぜ井出国子に、神が現れたかを、考えることにする。／ 神さまには、偶然ということはないから、明治四十一年、突如として、神が、井出国子に現われたというのではないはずである。／ 何千年か、人間世界の様子を見ていた神がこのひと（女）こそと決めるには、それだけの理由があったのであろう。どんな理由か、それを、想像することは、とても、私にはできない。／ しかし、神さまは、自分が、神さまになった、なりたちのことについて、こうであろうとかいたりはないししている。

私が、神さま宅をたづねた最初の日、神さまは、私を二の膳つきでもてなし、酒を、私の盃に注ぎながら、あんたが、こうして、わしの前に座ったのは、あんたが、来たくて来たのとは違うぜ、このわしが、よんだのや。

それというの、あんたの先祖と、井出家の先祖と、わしの生まれた吉永家の先祖とが、むかし、同じかまどの飯を食った因縁からや。（『心のはらいー第一巻神さまのこと』芹沢真一.P105.1973.朝日神社友の会心のふしん普及部）

## 大政翼賛会に指示を仰ぐ天理教①

芹沢光治良は、作家として有名になると、天理教とつながりのある文化人として教会本部から接触を受けるようになります。その事例として、大政翼賛会の文化部長だった岸田国土との面会の仲介を頼まれます。天理教の申し出は時局柄、国家に奉仕したいが何をしたらいいか教えてほしいというものでした。それに対して文化部長は「宗教の場合には、真理に奉仕したためにつぶされるようなことが、国家に対する奉仕になります」と諭されたというものです。どこまで本当の話で、どこから創作か分かりませんが。

年を越して間もなく（※1942, 昭和17年）、天理教の本部の偉い指導者が二人訪ねて来た。文書宣伝と布教部の「先生」のようだが、次郎が天理教の本部の先生に会うのは、それが初めてで、どんな風の吹きまわしかと、訝りながら会ってみると、二人とも国防服とゲートルに身をかためて凜々しく、次郎よりも五、六歳年上に見えた。用件は大政翼賛会の文化部長の岸田国土（くにお）に紹介してくれということであった。／次郎は岸田文化部長と個人的に親しくはなかった。同じフランス文学から文学の世界にはいった先輩で、親近感をいただいているが、文化部長に就任した時、その支援団体である日本文学研究会にも、加入しなかった。しかし、岸田国土が天理教に興味を持っていることを知っているから、紹介はできるが、天理教が文化部長にどんな用件があるのか、きいてみた。

「この時局に、天理教がどんなことをすればいいか、文化部長から、こうしてもらいたいということをお聞きしたいのですが……」／「国家への奉仕なら、天理教はもうずいぶん、しているではありませんか」／「いいえ、まだ足りませんが……なにを最もして欲しいか、文化部長から指示を得たいのです」

次郎は文化部長に電話をして、天理教の本部の人に会ってやって欲しいと、頼んだ。部長はすぐ来てくれれば会えるが、君もいっしょだろうねと、次郎に同行をもとめた。次郎は背広にゲートルもしないで、闘士のような二人の先生を案内して、翼賛会の本部へ行った。狭い部長室に、岸田国土は作家という表情ではなく、部長という厳しい顔で待っていた。天理教の先生は、先生の前に出た生徒のように慇懃に部長に話した。

「この時局にあたって、天理教に対して、こうして欲しいということをお伺えば、五百万の信徒は、喜んで国家に奉仕いたします。部長から、国家が今、宗教団体に最も要求することは何か、指示を得たいと思ひましてうかがいました」

部長はしばらく沈黙していたが、不機嫌そうに言った。

「森君の紹介でなければ、お会いするつもりもなかったのですが……宗教が国家に奉仕するとは、どういうことですか。**それは、宗教の墮落ですよ。戦時であればあるほど、宗教は国家を超越しなければならない**でしょう。国境を越え、民族を越えて、宗教の活動は普遍的でなければなりませんよ。ね、森君、**宗教は真理に奉仕するもの**ですね」／次郎は黙ってうなずいた。▽（『人間の運命』文庫版6. P432）

「宗教の任務は、たしかに仰せのとおりです。しかし、悲しいことに、我が国では、宗教も国家に奉仕しなければ、弾圧をうけて、破滅させられます。その点、わが天理教もしばしば苦い経験をいたしました。日支事変中にも、さまざまな命令で苦しみ、特に、教理の重要な部分の削除を命じられるという、ひどいめにありました。国家存亡の機には、教団のことよりも国家の安寧を選びました。従って、米英と開戦した今日、国家の危急に馳せ参じようとする五百万信者の志を思って、お目にかかりました—」

「天理教とは、そんな宗教でしたか。森君がまともに批判しているから、もっとまともな宗教だとばかり思っていました。……国家に奉仕したいと言われますが、**宗教の場合には、真理に奉仕したためにつぶされるようなことが、国家に対する奉仕になります**よ。教理の重要な部分を削除されて、なお信仰が成立していますか」

「そうです、信仰上非常に困難なことです。しかし、信仰の純粋さをまもるために、教団が解放を命じられるような事態になりましたならば、五百万の信者に動揺がきたしますし、国家存亡の時に、五百万の人間が動揺することは、国家安寧のためにもならないことと存じまして—」

「私は大本教の事件はよく知りませんが、あそこの幹部は、自己の信ずる真理を曲げないために、投獄されて、血を吐くような拷問にも耐えているそうだが、宗教家としては、国家権力と妥協するよりも、立派ですね。百万とか、二百万とかの信者は、そのために動揺したのでしょうか。また、そのために、国家の安寧が乱れましたか……私は、こんなことを申し上げたくはないが、森君がごいっしょなので、真面目にお話したまでです。当文化部からは、天理教にお願いすることはありません」

と、岸田部長は立ち上がっていた。繁忙にみえた。次郎は二人を案内したことをすまなく思い、お詫びしてお暇した。二人は深刻な表情で外に出たが、しばらく口もきけない様子であった。

「岸田さんは、どうしてあんなことを言ったのでしょうか」

しばらくすると、発言しなかった先生かぽつんと言った。そう次郎に問いかけているようなので、正直に答えた。

「私が申上げるべきことを、岸田さんが話したのかも知れませんが、私は勇気がなくて、そう申上げて、お二人が反撥して聞いてもらえないと、考えたりして……」／ と、言ってから、言い過ぎのような気がして、口をつぐんだが、痩せたもう一人の岡島と呼ぶ方が、悲哀をたたえた深い瞳を次郎に向けて言った。

「岸田さんのお話は真理です。天理教は立派な教えなのに、私達の精神が墮落しているのでしょうか。昭和十三年十一月の文部省の達しに対して、革新委員会をつくって、おふでさきやおさしずやみかぐらうたの大切なお歌まで、焼きすて、信者にも忘れるように命じたのは、国家の権威にあわせたと言っても……親神様や教祖様にすまないことでした。その上、米英と開戦したからとて、こともあろうに、さっそく大政翼賛会の部長のところへ指図を仰ぎに来るなどとは、全く恥ずかしいことでした。岸田さんのお話で、私は目からうろこがおちたような気がしました」（『人間の運命』文庫版6. P432）

『死の扉の前で』と『人間の運命』とでは内容が少し違っています。この依頼が「本部」となっていますが、これは中山正善のことなのか、あるいは別の人間(組織)なのか、判然としません。正善が進めるの改革が中山教への道であり、それを防ぐために教祖伝を連載するというのであれば、この依頼は正善以外の者ということになります。

戦争が終って、占領軍のもとに食糧難と社会混乱とがややおさまって、汽車旅行がようやくできそうになった頃、二十三年の秋の終りに、岡島氏が一人の青年に支えられるようにしてこの三宿の寓居の玄関に立った。—中略— 岡島氏は用件を急ぐのか、挨拶も抜いて喘ぎながら言った。／「先生にお願いがあって、生命をかけて上りました。是非お聞き届け下さい」

私はじっと岡島氏の顔を見て、何を言い出すのか待った。氏は出された番茶をゆっくり飲みほすと蒲団からおりて坐りなおし、「先生、『天理時報』に教祖伝を書いて下さい。それもできるだけ早く始めて下さい」と言い、改まってお辞儀をした。「教祖伝ですって……忙しいし、私の任務ではないですから」と、考えるまでもなく辞退した。

「敗戦後、教団では復元といって、教祖様にかえろうと、盛んに唱えています。教団というより、中山管長が主張しているというべきですが、復元の一号というのか、管長を真柱と呼ぶことになりました。真柱様は莫大な経済力を持っており、教団では神の代理者として絶対の権力を掌握しているばかりでなく、政治性もあり、性格的に専制君主のような強いお方ですから、復元といって教祖様の道にかえると言っても、自分に都合のいいような教団にしてしまう危惧が十分あるのです。現在すでに、親神の意図した広い世界に開かれた天理教を、狭く閉ざされた中山教にしてしまいそうです。それをふせぐ第一の方法は、教外の信頼のおける文学者に、真の教祖伝をお書き願って、『天理時報』に連載して、この際、先ず信徒にも、教団にも、社会にも真の教祖様を知っていただくことです。それには、先生をおいて適任者はいません—」

私は答えようがなくて黙っていた。／ —中略— ／「先生、こんな躰で上りました。教祖伝のこと、お断わりにならずに、考えてみてくださいませんか」／ 痩せ細った病軀をおして、死の覚悟ではるばる上京して、そう喘ぎながら言われては、ことわりたくても考えてみまじょうと、答えざるを得なかった。—中略— ／ それから暫くして、時報社の生田社長が東京教区長とかいう教会長を伴って、岡島氏の依頼の教祖伝はいつから執筆してもらえるかとの催促に來た。私は改めて辞退したが、この社長はM大学出でK大教会の役員を兼ねていたが、健康にはちきれそうな活動家で、私のためらいなど吹き飛ばすように、堂々と弁舌さわやかに述べた。しかし、私は飽くまで明確な答元を躊躇した。その後、活動家の社長は神奈川教区長の中沢隼人氏とともに現れて、私が「天理時報」に教祖伝を執筆することは、本部の承諾を得てしまったから、教団挙げての願いであるからとて、もう辞退できないように強引に説得した。そのとき運わるく、その夏の終りに突然起きた喘息の発作が、再び起きていて息苦しく、口をきくのもたいぎだった。その様子に気付いて、黒紋付の着物に袴の中沢隼人氏が—先生、喘息のようですね。八月末に発作が起きたのですか、それは教祖伝を書けという神のせきこみですね、お書きにならなければいけません……—というので、私も書くより他にないのかと諦めたが—

(『死の扉の前で』P24. 芹沢光治良. 1978. 新潮社)

『死の扉の前で』では岡島と機関紙の社長は別に来たことになっていますが、『人間の運命』では一緒に来たことになっています。ここには真柱批判的なものはありません。『人間の運命』のこの部分は昭和42, 3年頃に書かれ、『死の扉の前で』はそれから10年後の昭和53年で、その時間的差が両書の違いになっているように思われます。

天理教の機関紙「天理時報」の肥った社長が、岡島という痩せた人に伴われて、次郎を訪ねて来た。この岡島は教団の布教部の重鎮らしく、十七年の春、大政翼賛会の岸田文化部長に紹介して欲しいと、次郎を訪ねた（第十二巻「暗い日々」参照）ことがあって、旧知である。二人の用件は、機関紙に天理教祖伝を連載するようにとのことのでめった。次郎は当惑したが、相手はどんな条件も容れるからとて、容易に引きさがらなかつた。二人とも東京の大学を出て、教団にはいった人々で、話か通じあうために、却って次郎もむげにことわれなくて、正直な話をしてしまった— / —中略— / 天理教は世界最後（だめ）の教えであると、自称するが、天理教の神が、キリスト教の神のように真理の神であるか、敗戦とともに死んだ神であるか、次郎は知らない。死んだ神の一つであれば、天理教はまた、滅亡すべきものであり、日本民族の将来のために、一日も早く解散すべきである。次郎が教祖伝を書くとなれば、教祖の物語を書くのではなくて、教祖の観た神、説いた神が、キリスト教のように真理の神であるか、調べるためであり、知るためであるから、それこそ教祖に向きあって、真実の教祖像を創るのであるが、それが、信者や教団のいづくイメージと異なるものになる可能性もあるが、それでも、天理教の機関紙に発表していいものだろうか……

次郎の話すことに、二人は幾度もうなずいていたが、岡島が決然と言った。

「天理教では、敗戦を機に、復元することに決定しました。明治二十年代から今日まで、国家の法律や時の政府の方針にあわせて、応法の道を歩いて、教祖の教えを歪めて来たのを、もとの教えにかえそうとするのですが、全教団を挙げて、教祖にかえる運動をはじめています。それ故、先生のよごれない目で、真の教祖を探究して、教祖像を描いていただければ、教団も信者も、襟を正して啓蒙されましょう。その点、ご安心下さい」 / 「教祖像を通じて、天理教の神が、他の日本の神々のように、死んだものになっても、いいのですね」 / 「そう私は信じませんが……その時は、天理教は衰亡して、伽藍だけが残りましょう。私など一生を無駄にしたと、あきらめます」 / **「真の神だとわかった時には、必然的に、現在の教団について、批判が伴いますが、それでもいいでしょうか」 / 「それこそ望ましいことです。教団のなかにおる私でも、天理教は大改革を断行しなければならないと、考えることが多いのですから……」**

ここまで話が行っては、次郎は教祖伝を書くという難事を引受けるより他になかった。ただ、連載をはじめめる時期は、準備の都合で確約しなかつたが……資料の蒐集には、あらゆる便宜と協力をおしまないということであり、それがまた、次郎が「天理時報」に連載する決心をした原因でもあるが、その点について、詳しく話しあってみると、重要な資料は主として、真柱の手許にあるが、二人から真柱に資料提供を依頼できなかつた。教内の者にとっては、真柱はそれほど権威をもつ、近づき難い存在のようで、次郎のような教外者が、直接頼んだ方が、成功するだろうと、躊躇しながらの二人の話であった。（『人間の運命』文庫版7. P473）10



## 愈々教祖傳を執筆／誕生祭から本紙に連載／芹沢光治良氏抱負を語る

本紙ではかねてから本教々祖伝の本格的完成を期してその執筆を作家芹沢光治良氏に依頼中であつたが、いよ／＼来る教祖誕生祭頃から本紙に連載されることになつた、芹沢氏は一昨年来教祖様、及び本教の文献、史料を蒐集して想を練つていたが、最近ようやく構想がまとまり執筆を開始することになつたもので、これにより本教々信徒長年の希望であつた教祖様の文芸的伝記が得られるわけである。なお、**氏はさきに本紙に『懺悔記』を連載、本社出版部から単行本として刊行されまた、最近『秘蹟』を刊行している**、同氏は執筆に際しての抱負と、教内一般に対するお願いとしてを次のとおり語つた

今年は教祖伝に筆をそめたいと思う。できれば、誕生祭ごろから、天理時報に掲載したい、書かなければならないと、永い間心の重荷になっていたし、最近、フランスで発行しているカトリック教の機関雑誌に東洋人の信仰告白を書くことにしたが、その前に教祖伝の一郡分でも書くことで、自分のこころのなかで天理教を明瞭にしておきたいからである。／ 私は教費をおさめていないから天理教の教徒ではない、芸術家として死にたいと願う点で、何れの宗教に属したくない、その点で私の書く教祖伝は、一人の小説家の見た教祖で、信仰ある者の仰ぐ教祖ではなかろう／ ただ、私の両親は天理教のために一生をささげた／ 私は両親から育てられもしなかつたし、(これも両親の信仰生活の結果であつたが) 両親からなに一つしてもらわなかつたが、神を仰ぎ神について考えることを、幼年時代から知らず知らず教えられたことを両親から他に如何なるものを与えられたよりも、幸せであつたと、近年は感謝するようになって、私の考える神が、両親が一生をささげた神であつたかどうか、それは問うことは無用だ神は一つしかないはずであるから、そんな訳で、私は好奇心や興味のために、教祖伝を書くのではない／ 私は天理教を知っているようで、知らないかもしれない、私の知つた天理教は父の属した岳東大教会を通じた天理教であつたかも知れない、各大教会はおのおの特長があるが、その特長というのは、言葉をかえればゆがみである、従つて、多くの信者はゆがんだ天理教しか知らないのかもしれない、**教祖様についても、知つているようで、ほんとうは知らない**、死後まだ七十年にもならないが、信仰という光芒につつまれて、(或る場合には意識的につつまで) 眞実がぼやけてしまつている点もあろうし、忘れられた点もあろう、特に、私のように、一布教師の子供にすぎない者には、伝説のような教祖しか分つていない、その点、キリスト伝を書くよりもむずかしい

それで御本部のみなさんや信者におねがひしたいのだが、**ご教祖様について、どんなつまらないことでもご存じのことがあつたら知らせていただきたい**。文書があれば、道友社を通じてでもよしお借りしたい。特にご教祖様のご存命富時のお話などが、どなたからお聞きになつたことでもよいから、聞かせてもらいたいし、また、どんなつまらないことでも記載した雑誌なり、聞取帳なりお持ちの方があつたら、お借りしたい 私は筆をそめる前に、教祖について書かれたこと、語られたこと、総てのものに一おう目をとおそうと思つているから、できますことなら、おそくも二月末日までにおかりしたい／ 教祖伝というような仕事は結果においてたんに私の作品だということだけですまされない影響力があるから、右のお願いをする次第である



# 第一章冒頭部分

連載第13回から「一章」が天保9年10月26日の場面から始まります。この書き出しを中山正善が気に入って『稿本天理教教祖伝』に使ったので、『教祖様』が単行本として出版されたときには、誕生から神がかり前までを第一章とし、神がかり場面を第二章とする構成に変更されました。

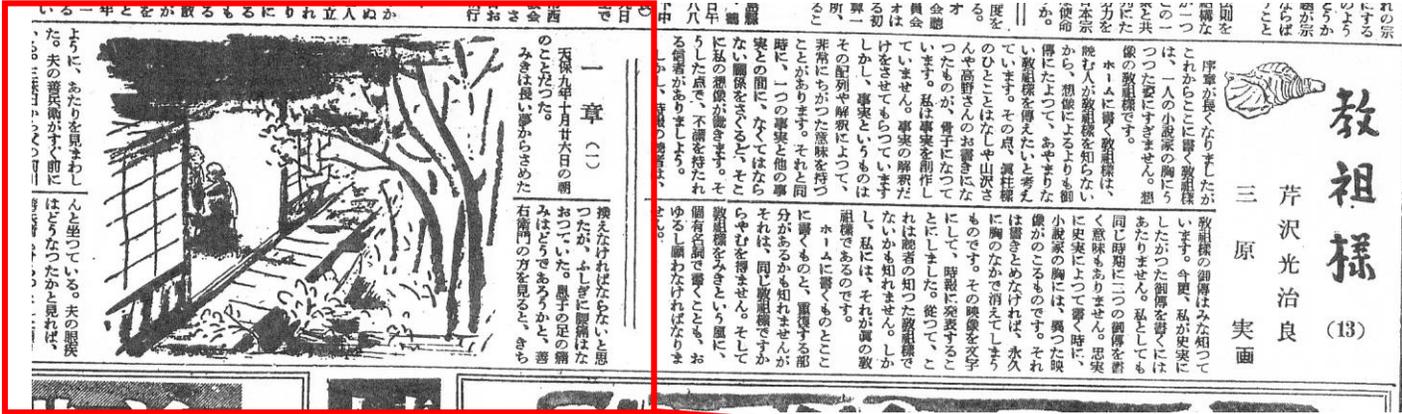
## 『稿本天理教教祖伝』

### 第一章 月日のやしろ

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天下った。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

神々しい威厳に充ちた声に、身の引締まるような靈気がその場に漲った。

戸主の善兵衛も、修験者の市兵衛も、親族の人々も、誰一人頭を上げようとする者もない。それは、今までに聞いた事もない神であり、思いも寄らぬ啓示であった。善兵衛は、初めの程は全くその意味を解し兼ねたが、考えると、この啓示は中山家にとっては実に容易ならぬ重大事であり、どうしても実行出来そうにない事である。と、思い廻らすうちに、ふと念頭に浮かんだには、去年の冬頃から今日に打続く不思議な出来事である。・・・



『天理時報』昭和26年1月28日号第一面

『天理時報』に連載された「教祖様」の「序章」の部分は単行本として発売された『教祖様』には収録されませんでした。その序章の部分になぜ神がかりから書きだそうとしたのか、いかに「教祖様御伝稿案」の完成を期待していたのかが記されています。中々読む機会がないところなので、そのポイント部分だけを引用しておきます。

### 【序章】（四～六）①

#### 〈四〉

予告に対して、資料を貸してくれる者は一人もありませんでしたが、信者から熱心な応援の手紙をたくさんもらいました。その応援で知ったことは、神がかり以後の教祖伝を書いて欲しいということでした。神がかり以前の教祖伝については、よく語られているが、その以後の教祖様については、知ることが少いから、是非そこから書いてくれと書いて来る人が多かったのです。

実は、神がかり以前の教祖様の日常性は、山沢さんの稿案を通じてもよく判るし、四月から発表しはじめても、半年ぐらいは神がかり以前を書いていられるから、その間に難しい後半の材料を集めればよしと、私はかなり楽観していたのです。しかし、読者の手紙によって、先ずその楽観をすてました。

教祖様の伝記では、神がかり以後こそ重要で、以前はついたりでしょう。キリストの伝記にしても、大工時代のキリストについては何も伝えられていない。そう考えて、教祖様の神がかり以後を知ろうとすると、具体的な生活がわからないのです。書かれた多くの教祖伝は、その点になると作者の信仰告白で、教祖様の日常性が記述されていません。

私は、はたと弱りました。

その頃、末弟が京都大学の文科を出て、おぢばに滞在していました。その弟に頼んで、天理図書館などで神がかり以後の教祖様について調べさせました。本部のしかるべき人々に会って話をきかせました。口下手な末弟は、どこでもいゝ資料を得られなくて、図書館で道の友の一号から読んで教祖様についての記事を写すぐらいがせきのやまでした。

この間、私は真柱に無理なお願いをして、親切な申出をうけたことも、生涯忘れられない感謝ですが、その厚意も無にして、なかなか教祖伝に手がつかないうちに誕生祭を迎えました。↘

【序章】（四～六）②

↘ —中略—

〈五〉

誕生祭にお地場へ来れば山沢先生がお会いして下さるから—という道友社からの便りが、私の心を誘惑しました。

—中略—

山沢さんが会ってくれるなら、十九日にお地場へ行こうと。

—中略—

**私は教祖伝を書くとしても、神の観念がはっきりしなければ、手のくだしようのないことを述べて、私の神についての考をくわしく話しました。**山沢さんにあうまでは、そこまで話すつもりはなかったが、お会いしたら、話さないではいられなかったのです。その神が天理教とどうちがうかを山沢さんに問うためではなかったのです。その神観念から教祖を見るのだということを、先ず山沢さんに知ってもらいたかったのです。教祖は人間であって、神ではないと考えていることも正直に山沢さんに話しておきたかったのです。

山沢さんは黙って聞いていました。私の考に同意したのではなくて、私が何故そういう話をするのか理解してくれたからです。

〈六〉

**山沢さんに、教祖の神がかりから書きたいと、私のプランを話しました。**そして、神ががり以後の教祖の日常生活がよく分らないことも話しました。伝記を書くのには、その日常性が詳細に分らなければ、不可能に近いことも話しました。日常性が明瞭でないから、作者は信仰で塗りつぶすことになるのでしようが、山沢さんの教祖様御伝稿案はあくまで事実によろうと努力している点でも、実にみごとであるが、いつ完成せられるのだろうか、きいてみました。というのは、いざとなれば、私も山沢さんの教祖様御伝稿案によるより他になかったからですが、山沢さんのお仕事が完成すれば、私は自分の仕事のめやすがつくと考えていたからです。

「今年中には完成したいと思います。仰しやる日常性を知るといのは、なかなか困難なことですが、古い大教会などを調べたら、おぼろげに分って来るかも知れませんから、これから大教会をまわって、よくしらべてみましょう」

そう山沢さんは申しました。それほど、教祖伝について私を元気付けた言葉はありません。

天理語学専門学校の講師とは高野友治でしょうか。「古田」は昭和20年から同23年まで天理外国語学校の校長をしていた古野清人でしょうか、同氏は晩年に日本宗教学会会長を務めています。また、「二人の古老」の一人は中山慶一でしょうか、『天理時報』(昭和25.11.12号)に掲載された「教祖様」序章(三)に同氏の名前が出ています。

次郎は心を決して、資料を集めるために、天理教本部へ行くことにした。宿舎は天理時報社から、岳東大教会の詰所に頼んであった。公式には初めて行くこととて、すべて時報社委せにしたが、その時報社が、編集部には二人か三人の信行の記者がいて、週刊の機関紙を発行している小さな社で、心もとなかった。肥って活動家にみえた社長は、他に教務があって、時報社にいなかったが、年かさの求道者らしいA記者が、資料蒐集について、四人の人に面会の約束をとってくれてあった。

そのうち**二人は古老**で、その人々の両親が教祖とともにあった頃の語り草で、**信仰談としては面白いが、資料にはならなかった**。三人目は、天理教の伝道史をさかんに発表している**天理語学専門学校の講師**で、天理教に関する資料を最も所持しているということであったが、教祖に関する資料について問いかけると、信仰にはいった自己の体験を詰って、しきりに話を避けた。時には座敷の横に特別につくった棚から資料らしい紙綴りを取って来て、一枚々々頁を繰るようにしながら、これは困るなあと独り言して、棚にもどしたりした。二時間ばかり面談して、**この人は資料があっても貸したくない**のだと、さとった。己れの手許から出た資料によって描かれた教祖伝で、迷惑をこうむることを怖れているにちがいがなかった。／四人目は**古田元九州大学教授**であった。古田は宗教社会学者で、十数年前、東京でフランス社会学会が結成された時、次郎も参加したが、彼は重要な会員で、次郎と親しかった。その古田が天理教本部にいるとは考えられなくて、同名異人であろうと思っていたが、やはり古田であった。彼は大学で真柱の同窓であった関係で、戦争中に九州大学をやめて、この地に疎問して以来、真柱の庇護のもとに、研究をつづけていたが、教祖の資料について、印刷になったもの以外のものを求めても、無駄だと、忠告した。印刷されたもののなかに、正確な教祖伝も、資料としてまとまった物も、ないようだが、**教団で発行した文書を歴史的に調べるより他にない**とも、忠告した。真柱はあらゆる資料を集めて、その信憑性を一つ一つ研究しているようだが、それを外部に出すようなことはなかろうとも、話した。真柱と親しい古田の言であるから、みな真実であろうが、次郎は、真柱の信頼する彼から、せめて前真柱のものした教祖伝を借りられるように頼んで欲しいと、話してみた。

「あれは、たしかに数部みごとな写真刷りがある筈だが……そうか、門外不出だと真柱さんが言ったとすると、僕がお頼みしても駄目だな」／「どういうわけだろう」／「君の教会からは、松本という歴とした共産党員が出ているからなあ」／「松木君は共産党員でも、僕には関係がないことなのに、ね」／「なんとと言っても、此処は閉ざされた世界で、ここの論理があるので、ね……特に彼が天理外語に在学中に、頁柱さんを主人公にして誹謗する戯曲を発表して、学校を出たのは、君の影響下にあったからだ、理解されたりからね」／「それまで僕は松木君に会ったこともないのに……その問題はとにかく、真柱さんから資料の便宜を得るには、どうしたらいいのだろうか」／**「真柱さんの信頼を得るんだな。友情を求めろんだな」**／「友情を求めろって、相手は神の代理者だし、ギブ・アンド・テイクの関係ではなかろうし、僕にはお手上げだ」／「案外ギブ・アンド・テイクの関係が、信仰の上でも真理ではないのか。最近、天理教では、因縁の納消ということ、さかんに言うが、その実行面では、神と人間のギブ・アンド・テイクのような……」(『人間の運命』文庫版7. P505)

昭和21年に創刊された『復元』の2～14号に山澤為次著「教祖様御伝稿案」—8回掲載—が出ています。繰り返しになりますが、この「稿案」は本文に対して詳細な注が施されたもので、資料的価値が非常に高い。「教祖様」(序章)には「教祖様御伝稿案」と出ていますが、『人間の運命』では「『教祖様私案』と題して、薄い、六冊の仮綴の印刷物」となっています。「教祖様御伝稿案」は昭和23年10月発行の『復元』14号に第8回が出ており、芹沢光治良が教祖伝資料を探している時期には公刊されていたのに、芹沢の話の中には『復元』は出てきませんから、誰も『復元』について教えなかったこととなります。刊行当初はごく内輪の中だけで読まれていた雑誌だったのでしょうか。

また「年表」は『復元』39号に掲載されている「天理教教祖年譜表稿案」の原型ではないかと思われます。39号のものは「こふき委員会」作になっており、昭和31(1956)年に編纂されたと書かれています。下段に詳細な日本、世界の参考事項があります。公開されている教祖年表はこれしかないので、為次氏が書いた年表に参考事項を書き足して昭和31年に作られたのではないかと推測します。

岡鳥は是非会いたいからと、病床で迎えてくれた。結核で痩せほそって、痛々しかったが、病床に半身をおこして、午後の熱もなく、気分がいいからと言うので、次郎も四人に面会した模様を簡単に報告して、執筆の不可能に近いことを伝えた。岡鳥は驚いて、A記者にすぐ本部へ山沢先生にお願いに行くように、自分も電話でお願いするからとせきたてた。病人を疲れさせるのを怖れて、お暇したが、A記者は山沢先生がお会い下されば、収穫があろうが、身上(病気)でお休みだからと、みちみち悲観的な観測をもらしたが、次郎を岳東大教会の詰所に送って、ともかく先生の家へ行ってみると言った。 —中略—

翌朝、次郎は神殿横の大きな日本建築に、A記者につれられて行った。そのなかの、畳に椅子をおいだだいた広い殺風景な部屋で、しばらく待っていると、山沢先生がはいつて来た。’和服に袴をつけて、次郎よりも五、六歳若いように見受けたが、次郎が休養中に面会を求めた無礼をわびると、病気というより、ただ雑用で忙しくてと、静かに答えて、

「私の方では、一度是非森さんにお会いして、松本一夫君のことで、お詫びしたいと願っておりました」と、穏やかな表情である。意外な言葉に、次郎は黙って相手を見たが、澄んだ目が印象的であった。

—中略— / 「今度は教祖伝をお書きになるについて、協力をというお話で……私は森さんの作品には、共感を持っておりますので、協力を惜しみませんが、実は資料といえる物が、私の手許にはございません。ただ、資料蒐集には、真柱さんが前から大変ご熱心で、戦後また、復元ということ唱えられて……資料についての真偽の研究もいたしております。私も真柱さんをお助けして、その方の仕事をも、させてもらってございまして、私の研究した部分は、その都度、ごく僅か印刷にして、真柱さんや関係の方々にお目にかけておりますが、まだ公表すべきものでなくて、真柱さんの復元運動の資料に供しているのに過ぎませんが、まとめて後程お宿の方へお届け致しますから、お読みいただきまして……いざご執筆なさって、疑問がおありの場合には、その都度、お手紙なり、またはお目にかかるなりして、ご協力いたしましょう。その方が、雑然とした資料にぶつかりますより、時間と労力の経済になると思いますが、如何でしょう……」 / 「そう願えれば、大変ありがたいのですが……」 ♪ (『人間の運命』文庫版7. P507～)

山澤為次の死を知った状況は、「教祖様—序章」と『人間の運命』では異なります。『人間の運命』はだいぶ年数がたってから書かれた創作なので、「教祖様—序章」の方が事実に近いと思えます。

▽「それは、本部で誰でもして差し上げなければならないことですから、遠慮なく仰有って下さい……今日は折角の機会です、ゆっくりお話をうかがいたいのですが、本部の方の御用がありますので、おゆるし願います。この次からは、五日前にお知らせいただければ、必ず終日あけておきますから—」

そう失礼を詫びて、山沢先生は静かにもどって行った。次郎はこの人に会ったことで、資料蒐集には不成功であっても、この宗教都市で、信仰を身につけた人物にただ一人会っただけで、満足した。それほど、この宗教都市で会った人々が俗物であったから。—中略—

(P518) 次郎は週に二日を教祖伝の執筆にあてることにした。**山沢先生から提供されたものは正確な史実であった。特に年表は苦心して作成したらしく、正確で、しかも詳しく、それだけで教祖の履歴がわかった。その他、資料を整理して、六回真柱に報告したらしく、「教祖様私案」と題して、薄い、六冊の仮綴の印刷物があったが、教祖が神がかりになるまでを、簡単に綴ったもので、これは次郎に非常に参考になった。**

その後、この先生との書簡の往復で知ったが、真柱も十年がかりで、教祖伝の定本をつくる考えで、信頼する数人の者に命じて、このような「教祖様私案」を書かせて、月に二、三回全員を集めて、討議をしているが、真柱の意図する教祖伝は、はじめから教祖を神として、書くことにあるようであった。しかし、この先生の考え方は、教祖はあくまで普通の婦人であったということに終始しているの、その「教祖様私案」は真柱に喜ばれていないらしかった。

次郎はこの先生に頼んで、教祖のものした「おふでさき」の全集をもらった。その他、大和地方の農村の三百年間の歴史についても、勉強をはじめたが、茂男が天理図書館で、古い雑誌や書物のなかから、教祖について書かれたものを筆写して、次々に送ってくれた。そんな訳で、次郎も翌年（一九四八年(ママ)）の春には、教祖伝の構想が大体まとまった。

次郎は、中山みきを人間（小地主の主婦）と見る立場に立つが、教祖伝であるから、みきが神がかりになるところから、筆をおこそうと考えた。それ故、山沢先生にも、早く神がかり以後の「教祖様私案」をまとめて見せて欲しいと頼み、神がかりについて、色々意見を聞かせてもらいたいことがあるから、丹波市町に訪ねたいと、手紙を出した。待っていると、折返し、返事があった。

この先生が指定してきた日の三日前の午後、次郎は電話で呼ばれて、ペンクラブの事務所へ行った。—中略—  
家に戻ると、天理時報社から電報で、山沢先生が急死した知らせが届いていた。教祖伝の執筆の出鼻を挫かれたように、一瞬うろたえた—（『人間の運命』文庫版7. P507～）

こかんの死因について、読者から「流産のため」という内容の手紙が送られてきた。光治良が入手した資料にはそのようなものはなく、史実かどうか不確かであった。そのため、中山正善に質問したところ、「どんなに辛いことでも、筆を曲げないので、却って僕は君を信頼した」との返事を得、『教祖様』には「流産をした」と簡潔に書かれています。こかんの流産について書かれているものに『増野鼓雪全集』巻22「小寒子略伝」があります。ただ、『おふでさき註釈』には昭和3年版には「身重となられ間もなく流産」とあるのに、昭和12年版からは「身上に重いお手入れを受けられ」となって「流産」は伏せられるようになります。明治8年に小寒が妊娠していたという事実は7号72「なわたまへはやくみたいとをもうなら 月日をしへるてゑをしいかり」の解釈に重大な影響を及ぼすことになるからでしょうか。

教祖の末娘のこかんが、まだ十五、六歳の娘の頃、母の仰せに従って、山路を徒歩で越えて大阪へ神名を流しに出掛け、教祖が貧のどん底におちきって、食にも窮した朝夕につき添い、その後信者達から「若い神」と敬われたのに拘らず、姉のはるが死亡すると、姉の嫁ぎ先の梶本家へ手伝いに行ったまま、教祖の意思に反して帰ろうとせず、三年後（明治八年）の秋、病の床に就き、危篤状態になってからようやく教祖のもとへ帰る決心をしたが、「それはこかんさんが義兄惣次郎と情を結んで、**流産したため**だった—」ということ、明治初年から信者であった父親から聞いたとて、三人の熱心な信者が手紙で知らせてくれた。

天理教側の史実で、私の手にはいったものには、こかんが未婚の母になりそうに流産したように感じさせるものは、何処にもなく、現在こかんを尊敬する信者が多いが、こかんの病氣とその帰宅と死とは、教祖が奈良監獄に収監されていた時であり、こかんの急死によって教祖が帰宅をゆるされて、死せる末娘に対面した場面は、教祖の伝記で最もパセチックな頁になりそうだった。それが、万一こかんが流産したことが真実であれば、三十九歳ではじめて女の愛に生きようとし、母になる喜びを前にして死んだこかんの一生こそ、哀れでもあり、人間的でもあり、小説家として最も創作慾をそそられるが、三人の読者から教えられたからとて、真実でなかったら、わが『教祖様』に大きな汚点を残すことになる。その真実は真柱こそ識っているものと信じて、最後に会った時、真面目に質問してみた。その時、真柱は真剣な面持で私に話した。

—その問題に直接な答えにはならないかも知れんが、君が教祖を書くからには、教祖の関係者、家族、子供、孫などが登場するに決っているが、それはみな、僕の親だったり、祖父母だったり、僕の大切な身内の人々ばかりだよ。人間は誰でも小説のモデルにされて書かれるのは、面白くはない。迷惑だと思うだろうが、親様のように人類の母になろうとしたお方を書く場合、その近親者が登場するのは、止むを得ないし、プライバシーを侵すからとて、文句は言えないと、最初から肚(はら)を据えていたよ。それどころか、親様の夫、親様の子供等について、書くのは辛いだろうと、君に同情さえしたが……しかし、いざ書かれてみると、どんなに辛いことでも、筆を曲げないので、却って僕は君を信頼した。しかも、そのことで、君は僕に予め何も言訳をしなかったろう。君は自己の信念に従って、君の作品を書いたのだから、それでよかったし、僕は教えられもしたよ。（『死の扉の前で』P122）

こかんはいつもどおり、誰よりも早く起きたのだが、急に目先がぐらぐらとして、家ぐずれたような気がして、しゃがんでしまった。／ 何か吐きそうな気持ちになった。胸に何かがつかえているようで起きる元気もなかった。

「どうしたんだね」／ 惣次郎は心配した。

「気持ちがわるくて、起きられそうもないんです。すぐよくなると思いますけれど」

「ゆっくり休んでいなさい。心配することはないからー」

惣次郎はこかんをいたわり、弟子を督励して、朝の用意をした。四人の子供があつて、こかんはおちおち休んでおられなかった。しかし、起きようとすると、頭がふらふらとして、たおれそうになるので、寝ているより他になかった。実はこかんはその前夜おりものがして、**流産をした**のだ。そうとは惣次郎に話せなかったのだ。（『教祖様』P270. 善本社版）

【昭和3年版『おふでさき附釈義』（11号25－40総註）】

「……明治八年、**小寒女は梶本家に在って身重となられ間もなく流産**されたが、産後の経過思はしからず、……」

御教祖の三女にして櫛本村の梶本家へ嫁せられた春子殿が、明治四年（※実際は五年）三人の子を残して、遂に帰らぬ旅に赴かれた。其の翌朝御教祖は、一人梶本家へ行き給うた。／ 小寒殿が姉春子殿の死を、深く痛み給うたのは當然であるが、それにも増して姉の遺子が、行く末如何になり行くやと、同情の涙に暮れ給うた。其の時梶本家からは、小寒殿を後妻として迎へたき旨申し込まれた。

其の頃中山家では秀司殿の内室松枝殿が、一家の主婦として万事處理してをられた。従前主婦の地位にあつた小寒殿は、最早中山家としては隠居同様の身である。唯御教祖に奉仕して、其の世話をせらるゝのみが、為すべき凡てであつた。／ 梶本家からの申込に對して、御教祖は『小寒は此の屋敷から出るのやない出すのやない』と仰せられて、極力反對し給うたのである。然し小寒殿の心は右の様な事情から次第に梶本家へ傾いて行つた。御教祖は、最早小寒殿の心を引留むる術なしと観て、這に『三年の間貸す』と仰せになつて、梶本家へ遣られたのである。／ 梶本家に於ける小寒様は、神棚に向つて時々扇の伺をなされたり、山伏等の質問に答へられたり、時には神懸もあつたとの事であり、其の時の扇は今尚梶本家に保存せられてある。

三年の月日は夢の如く過ぎた。御教祖は一日も早く小寒殿の帰られるのを待たせ給うた。けれども**既に妊娠してをられた小寒殿は、中山家へ帰るのを好まれず、況(ま)して梶本家では帰す心は更に無かつた**のである。／ 其所に神意と人意との大きい矛盾がある。見許し聞逃してをられた神様も、遂に心得違を諭されるべき時が来た。小寒殿は明治八年六月末に至つて、流産せられてから病床に親しむ身となられた。／ 病気になつては人力で如何ともする術が無い。小寒殿は遂にお地場へ歸つて来られたのである。（「小寒子略伝」『増野鼓雪全集22』P23. 1928～29）

ここには「天理時報」に教祖伝を書くことになって、最初に中山正善に会う状況が書かれています。まず、井出くにの話を話すなどということの会話があって、次に教祖伝を書くので資料が欲しいという話に移ります。ここで正善は『天理時報』に教祖伝が連載になることを知らないように書かれています。とすると依頼の時に「本部の承諾を得てしまった」という「本部」とは具体的には誰のことかということが、疑問になります。

次郎は家にもどって、東大教会に電話をかけた。六時頃、来てくれと、真柱の伝言だという返事であった。悪い時間だが、今日の常識では、食事をすませて行くべきだとのことで、早夕食を手製のパンと鯖の味噌煮ですませて、出掛けた。

浅草の稲荷町は初めて行く街で、東京の下町で勿論戦災にあったものと、想像して行ったが、この天理教の大教会は、戦災をまぬかれていた。巨大な教会の方を訪れると、教会の外から裏の方へ案内された。仕舞屋(しもたや)造りの門構えの日本家屋に通された。間もなく、天理教を代表する老参議院議員が現われて、丁寧に次郎の相手をした。この老紳士は大学の先輩であると言って、静かに雑談をしたが、十五分もすると、真柱が気ぜわしげに、はいつて来て、大きな和服の体を次郎の前にすえて、／「中山です」と言った。／次郎が初対面の挨拶と書物のお礼をのべると、それを压えるように、言った。

森君、君が二代目教祖とか言う人のことで、何か話すなら、僕は会わないよ」／「二代目教祖と申しますと……」と、次郎は問い返した。／**「何とか、くにと言つたな。あの人のことは一切、僕に言わない約束してくれますか」**／兄の一郎とあやまっているのだろうと思ったが、次郎は重大な時には、決して弁解や説明をしない習慣である。／「ああ、井出くにさんのことですか。約束しますよ。あの人を二代目教祖だと思っていないんですが—」／「すると、僕になんの用があります」

「教祖様の伝記を書きたいと思うので、資料その他で、ご指導や便宜を得たいと思ひまして—」

ここでも、**「天理時報」に連載をたのまれていることを、わざと言わなかった。** ことを純粋な形で処置したかったからだ。

**「教祖さまの伝記は、僕の父、初代の真柱が書いてあるから、新しく書くことは、いらんですよ」**

「それは、印刷になっておりますか。実は、私は天理教の出版物を集めましたが、読むにたえる物はありませんし、初代真柱さんの教祖伝は、手に入りませんでした—」／「印刷になっていません」／「近く印刷になさる計画がおありでしょうか」／

「ありません」／「お借りできませんでしょうか」／「門外不出だからな」

「あの、新しく書くことはいらぬというお言葉は、真柱さんにとっては、その教祖伝があるから、必要のないことだということでしょうか……しかし、教祖は真柱さん一人のものではなくて、信者の教祖であり、或いは、日本人全体の教祖かも知れません。その意味で、信者にとっても、一般の日本人にとっても、教祖伝は他にも書かれていいではありませんか。僕が教祖伝を書こうというの、教祖に向きあって、天理教の神が何か、天理教の信仰がどんなものか、知りたいからですが……」

「なんだ、君は天理教の信者ではないのか」（『人間の運命』文庫版7. P500）

光治良が記す天理教内の正善批判

『死の扉の前で』の中に、昭和20年代後半の状況のような雰囲気、天理教内の識者の意見として、「教祖は初めから神だった」という説を主張し、中山家の安泰を凶っているという正善批判がなされています。ここでは大正年間に御母堂様(たまへ)が主になって真柱体制を築いていったことになっていますが、そうでしょうか。また、「中山みきは最初から神だった」という『稿本教祖伝』の編集主体はどこにあったのでしょうか。

「友達にならなければ、真柱様は先生にご自分を示さないし、お考えも伝えません。先生、友達になって、真柱様がお道を復元すると信じて、実はとんでもないお道にしてしまうことを、防いで下さい。活字刷の『稿本天理教祖伝』の草案の一部をご覧になっただけでも、とんでもない教祖伝を創ろうとしていることが、おわかりでしょう。**真柱様に都合のいい教祖伝にして、それを信者に押しつけようとしています**」

「真柱に都合のいい教祖伝ってー」／「根本的なことは、**教祖ははじめから神で、人間ではないとしています**。先生の親様は、一人の心優しい農村の主婦が、神がかりがあつてから、神の思召しに添おうと五十年間超人的なご苦勞をして、ようやく神の社となりますね。それが教祖の実像です。決してはじめから神ではなくて人間であつて、ただ神に近づこうと精進なされた。だから、教祖の雛型をふむという教理も成り立ちます。教祖が生れながらに神であるならば、雛型として人間は従えません」／「教祖が生れながらに神である方が、どうして真柱に都合がいいの」／「教祖様が昇天してから、飯降伊蔵先生が本席として、約二十年間、神のおさしずを取次ぎましたね。その間、初代真柱様は行政の柱として、本席は信仰の柱として、天理教を支えたが、信者は言うまでもなく先生方も、神の取次ぎ者であり信仰の柱である本席に、自然に心を寄せがちでした。教祖の孫であり、相続者である初代真柱様夫妻は、そのことがご不満であつたが、教祖の定められたことですから、どうにもできなかつたのでしょう。本席が亡くなると、また神のおさしずに従つて、上田ナライトさんが『おさづけおはこび』をなさることに決つていました。『おさづけおはこび』は、また、信仰上の中心行事であるから、信者はナライト様を本席に代つた信仰の柱と仰いだのです。それはまた、初代真柱様夫妻は喜ばなくて、若様こそ行政の柱と信仰の柱とを兼ねた強い真の真柱に育てようとしたのです。初代真柱様が大正三年に四十九歳の若さで亡くなれると、十歳の若様が管長になつたが、ご母堂様は、後見人の山沢や松村という大先生方の力を借りて、少年真柱を絶対権力をもつ真柱に成長させようと懸命でした。その手始めに、**大正七年にはナライト様が狂気だとして、御母堂様が自ら『おさづけおはこび』をなさるようになりました。**これで、**行政の柱と信仰の柱とを、中山家の掌中におさめて、現真柱様にゆだねたという、歴史がある**のです。大変孝心の厚い真柱様は、ご両親の口惜しさや願望をじっくり胸におさめておられると思います。それ故、天理教の専制君主のような独裁者になつたが、敗戦前は、天理教自身が政府や軍部から弾圧を受けて、真柱様も絶対権力を振えないで、自制していただのでしょうが、敗戦後は、信仰の自由が保証されたので、**復元という美しい名目で、大っ平に自己の復権をはかっている**のです。行政面では、しきりに教規を創つて、教庁機構を変え、中央集権をはかっています。信仰面では明治教典にかえて新教典を創り、正式の教祖伝を編集して、天理教の絶対権を中山家のものにしようとして励んでいます。その点、真柱様は偉大な徳川家康です……教祖伝で、教祖様を生れながらの神としたのは、本席がお亡くなりになつてから現在まで、お道の内外に、時々神がかりになつて道を説く者が現れて、本部でも苦勞した経験があるので、**真柱様は、中山みきの場合は人間に神が降りたのではなくて、はじめから神だつたとして、将来の安泰をはかっている**のです。新教典も精読してみれば、中山家の天理教だと、判明します。ですから、先生にお願いするのです。真柱様を説いて、まちがつたお道にするのを防いで下さい」(『死の扉の前で』P75)

この「教義講義」の資料はすでに何回も使っているものですが、大正期の天理教の変化を考えるうえで非常に重要ではないかと思えます。

2020.07P11

2022.08P37

大正期の改革は中山たまへ(幼名まち、中山みきの孫、中山新治郎妻)が、撰行者山沢為造、松村吉太郎の力を借りて、正善を絶対権力をもつ真柱に成長させようとしたものか。

大正8年諸井慶五郎、「教規講義」にて教務と信仰の権限を「真柱」として統一する必要性に言及

中山為信氏と同じ大正6年に29歳で東大法科を卒業した諸井慶五郎氏は同8年7月、教校において「教規講義」をしています。その主要部分が右に引用したところですが、天理教は明治21年に神道天理教会として認可され、明治41年「天理教」として独立します。独立以前というのは21年以降41年までということで、その時代は「教務上の権限」と「信仰上の権威」は神道天理教会の長である「教長」に集中されていた、具体的にいえば中山新治郎氏のことです。ところが一派独立後は「教務上の権限」である管長と、「信仰上の権威」である本部長に分かれてしまったというわけです。ただ、実態としては、教祖が身を隠された後、本席が「信仰上の権威」として明治40年まで存在します。それゆえに本席の口述記録である「おさしづ」が三原典の一つとされるわけです。この点が右の文章では無視されています。

そもそも明治期の宗教公認において、教務上の権限と信仰上の権威は並び立たない。ですから、教祖亡き後の天理教は本席飯降伊蔵と教長中山新治郎の並立状態で動いていくことになりました。しかし大正8年の段階ではその歴史が無視されています。

ただ、「信仰上の権威」を担うためには、その根拠が必要になります。その根拠として「おふでさき」にある「真柱」が持ち出されています。教長、管長である中山新治郎を教祖が「おふでさき」の中で「真柱」として道の後継者に指定していたとすればこの問題は解決します。この解決法を提示したのが右の引用部分の主旨ではないでしょうか。ここにも教祖の言葉を作ることによって、『おふでさき』の解釈による「聖典偽作」が行われていく姿があるように思います。

教規制定前即本教の独立以前に於て、教長と云ふ御名前前で前管長公の御一身に蒐中せられたる教務上の権限、並に部属一般教信徒に臨まれたる信仰上の権威と云ふものは、此教規の制定によりて少なく共形の上には二分せられたものと観念せなければなりません。即一は行政的教務の首班たる地位に立つべき管長として、一は教義の淵源たる唯一最後の道場たる教会本部長（教祖の遺したまへる御命名に従えば『屋敷の真柱』）としてゞあります。如斯（かくのごと）く我が中山家の御当主は、教規上の資格に於て別個の異りたる二つの地位に立たれるのでありますが、元々両資格は只御一人の兼ね有せらるべきものでありまして、他の冒す事を得ざる所に属しますから、我々教徒の仰で以て帰敬を捧ぐるの道に於て迷ふところはなく、要するに『真柱』としての本質に些の軽重を加ふる事とはなりません。国家法制の確立して厳存する以上、直接其支配の下に立つべき一派独立の許可と云ふ行政行為の結果、最早従前通りの慣行を固守すると云ふ事は不可能となりまして、どうしても国家の制度に準拠しなければならぬ必要上、各般の制度に付大に改廃しなければならぬ場合に立至たものが少なくないであります。（「教規講義」諸井慶五郎.P32. 1919—大正8(1919)年7月27日～8月2日に教校で開催された「第1回講習会講義録」）

金光教教祖の子孫

教祖の後継者 = 広前奉仕者

教団の代表 = 教派神道管長



金光教では、教祖存命中から教団公認化に動いていた教祖の息子、萩雄が教会長(神道教会)、管長(一派独立後)になります。  
 教祖が存命中に行っていた広前取次ぎは萩雄の弟宅吉が継ぎます。宅吉は明治26年に亡くなり、その後をまだ14歳だった子の攝胤が継承します。対して2代管長に予定されていた之照は明治44年に亡くなり、庶子である家邦が継ぐこととなります。

『教団の独立の意義を考える』 P22.橋本真雄.2000

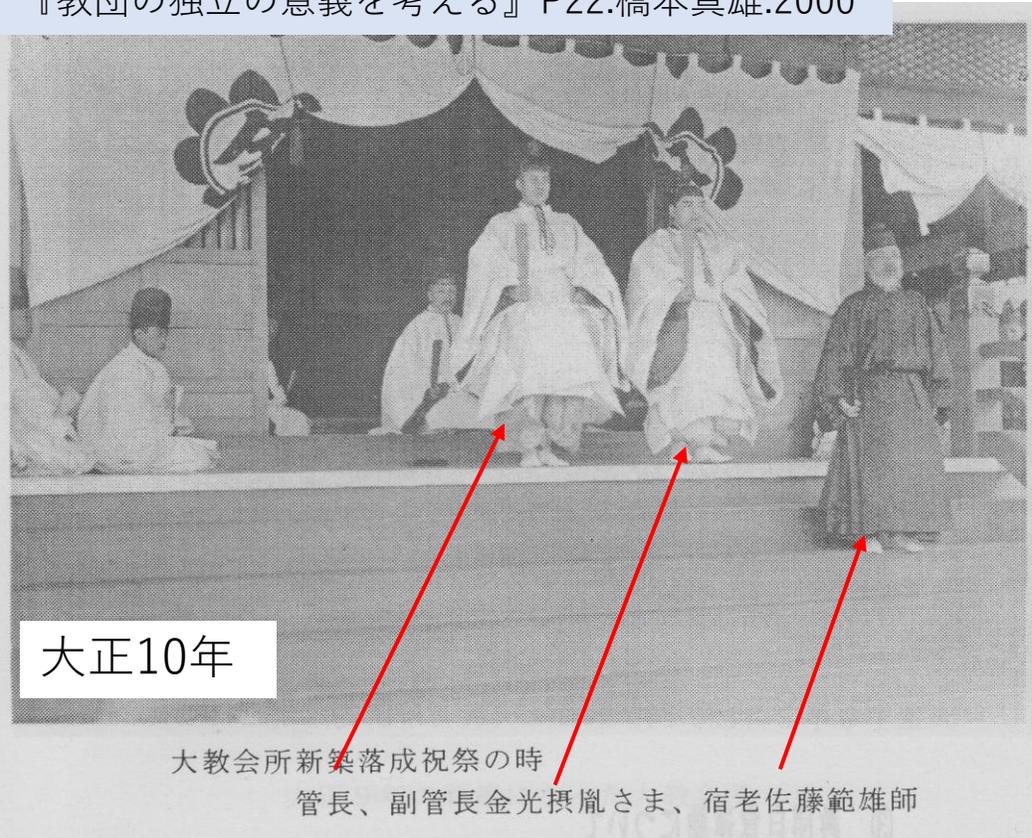
## 「金光様」になった攝胤、お上から任命された家邦管長

昭和5(1930)年、明治26(1893)年から37年間毎日神前に座り続けた攝胤は信者たちから「金光さま」と尊称され、「生神さま」と信仰されるようになっていました。それに対して管長家邦は信者とはもちろん、教会長とも日常接することのない、ただ祭典の時に顔を出す人でした。

そのような中で家邦管長は「金光様」と尊称される攝胤の存在によって自分の管長という立場が脅かされるような危機感を覚えるようになっていきます。そこで、家邦管長自身が神前奉仕を月に3日、それも1時間だけ行うことにしたのですが、37年間座り続けている攝胤に対抗出来るわけもなく、誰も来ずに止めてしまったそうです。

そんな中、教団独立三十年祭(昭和五年)における教団独立特別功労者表彰が行われることとなります。表彰者の中に神前奉仕者攝胤も含まれていましたが、自分は何の功もないと断ってしまいます。

そこで、昭和9年に「御礼之会」というのを教会長たちが作ってその功をねぎらおうとしたのですが、これも断ってしまいます。



大正10年

大教会所新築落成祝祭の時  
管長、副管長金光攝胤さま、宿老佐藤範雄師

2020.07P6

ところで何故このようなことが行なわれたのかというと、一般の教師・教会長でも管長に直接面談する機会が無く、その人格的な中身については無知で、ただ教祖さまの直系の孫で、お上(国家)から任命された最高の地位のお方である、という程度の認識でありました。したがって信者達にいたっては、祭典に参拝して遠くから見ることのできる、自分の信心にとっては無関心の人であります。そのお方とは対照的に、毎日欠かさず神前でお取次奉仕をされる金光攝胤副教会長こそ「金光さま」と尊称され、「生神さま」と信仰され、全教の信奉者から親愛をささげられる存在でありましたから、金光家邦管長は、そのことを最も恐れて、「お結界で奉仕する時は、すべて金光さまと呼ぶこと」「大教会所副教会長は複数とし、交替して神前奉仕を行なう」或いは「大教会所の神前奉仕は、大教会長の代理である」などと宣言して、管長自身が結界に座られたこともありましたが、誰も取次を願う者がなかったので止めてしまわれるという一幕もありました。(『教団の独立の意義を考える』 P22.橋本真雄.2000)

そもそもこの問題の原因は、明治時代においては慶応4年3月に出された祭政一致の布告、「王政復古神武創業ノ始ニ被為基(もとづかせられ)」ということで天皇家に繋がる神ではない教祖の教える神を説くことは許されず、そのため天皇家に関係のある神名を表に出して布教の許可を受けました。そして「三条教憲及慎誠十二条に則り惟神の大道を宣揚すへし(神道部属金光教会明治18年教則)」という目的が掲げられました。この組織の長が金光菘雄であり、一派独立後は勅任官という高級公務員と同等の待遇を受ける管長になりました。「国家の権力によって動くところの管長、管長権という別の原理で支配される」教団がそこにはあります。しかし同時に教内には教祖の信仰を受け継ぐ要素も存在します。金光教の場合は幸運にも教祖直系の金光分家が数十年間にわたり広前取次ぎという地味な仕事を果たし続けました。そして「生き神様」「金光様」という尊称を自然と受けることになりました。教祖の後継者と国の末端支配者である管長を一つの教団の中で両立させることは難しい。その調整法として、**教祖の後継者が管長も兼ねるという形で金光教はこの問題をクリアしました。**

この神前奉仕の御用が本教至高の聖務であって、他の侵犯を許さないということになると、管長の方はどうなるか。管長が国の制度上一教統理の最高権力者であることは変りがない。そこで管長のところの規定が同時に改められて、こんな表現になっている、「管長ハ本教最高ノ栄位ニシテ、本教規ニ依リ本教ヲ統管ス」と。一方は至高の聖務、一方は最高の栄位です。

だが、こうなると、この両者の関係はどうなるか。一方は信仰の問題、一方は教団政治の問題といってしまうと、抽象的に考えれば、それで少しも問題にならぬようにみえるかも知れぬが、具体的に教団の運営について考えると大問題です。本教が宗教であり、信仰により、信仰のために働きをしていく教団である以上、その運営統理も当然信仰の中心にもとづかざるを得ぬはずであります。であるのに、その統理は、国家の権力によって動くところの管長、管長権という別の原理で支配されるというのですから、大いに問題である。しかし国家が管長制度をとっていた当時においては、これを根本的に解決する道はない。してみると、当時の法のもとで考え得ることは、せめて、管長と神前奉仕者とが同じ人になれることによって、両原理のはたらきを調整するということが、まあギリギリの線ですね。そこへもっていくほかに道がないということになるわけです。(『教団』P54. 大淵千 仞. 1968. 金光教本部教庁)

## 天理教の場合

天理教の場合は、管長が教祖の子孫であり、教祖の後継者は血の繋がりがなかったことが、金光教と異なります。この場合、教祖後継者としての正当性が問題になります。そこで考え出されたのが、「おふでさき」に用例がある「真柱」でした。中山家の養子になって、教派神道、天理教の初代管長になった中山新治郎が、その誕生前に、教祖が「真柱の真之亮やで」といわれたということになれば、教祖がその後継者として指名していたということになります。本部内でこの作業が行われたのが、明治30年代末から、昭和3年まで、ほぼ大正年間ということになります。この時期の天理教団の最高責任者は管長摂行者山澤為造でした。

正善は『おふでさき』と『みかぐらうた』しか、信じてはならぬと言い、  
教祖様がお話しになったと伝えられるお言葉はすべて抹殺した

話は本部内の正善批判に戻ります。芹沢は正善が「教祖様がお話しになったと伝えられるお言葉はすべて抹殺した」とも、また「『おさしづ』の都合の悪い部分は削除した」とも教内で語られていることを書いています。前に紹介した渡辺優「教学と宗教学の幸福な結婚？」の論文は、教祖が語ったとされる言葉が抹殺されたので、それを「声の信仰」として復活させるべきだという主旨なので、まさにこの正善批判に沿ったものであることが分かります。

「真柱の真之亮やで」というのも教祖が新治郎が生まれる前に語った言葉ということになっています。

「友達になれ、なれと、言われても、たがいに子供ではなし、簡単に友達にはなれんよ。無理だなあ」

「先生、真柱様の場合は容易です。権力をもつ独裁者には、一つの盲点があるものです。あらゆる場合、すべての物を独占したいという慾求が、本能になっています。換言すれば、慾深ですから、それを満足させればいいのです」

私は呆然と答えようがなくて黙ってしまった。

「先生、**真柱様は教祖様の書きのこされた『おふでさき』と『みかぐらうた』しか、信じてはならぬと言って、教祖様がお話しになったと伝えられるお言葉はすべて抹殺しました。**そればかりでなく、史料を全部擱んでいるので、『おふでさき』でも、真柱の意とする天理教に都合の悪い部分は抹殺する怖れがあります。特に本席様を通じて二十年間親神がさしずしたお言葉は（これを『おさしづ』と呼んでいます）控えていた先生方が速記して、厩大な史料として残っていますが、これを全部通読した者はないでしょうから、**都合のわるい部分を削除するのは、簡単**です。真柱様は本席の存在をも抹殺したいらしく、本席様の話をして不機嫌になるので、本部の先生方はたがいに本席様のことは禁句だといっておりますし、本席様の子孫は本部で重要に扱われていません。そんなことはともかく、親神が教祖様を通じて語られたお言葉も、本席を通じての『おさしづ』も、中山家のものではなくて、人類のものとして、すべて永久に伝えるべきではありませんか……それ故、また、先生に真柱様の友達になって、真柱様が史料を廃棄なさるのを、とめて頂くか、それが不可能ならば、廃棄なさった史料について、将来のために記録して頂きたいのです」（『死の扉の前で』P77）

『天理教学研究』天理教学の研究雑誌名。昭和25年（1950）4月創刊。刊行頻度は不定期で、年3回刊行の時期もあった。昭和34年から38年、昭和46年から55年の間は休刊していた。発行所は天理教道友社。編者は創刊から第20号（昭和45年10月）までが天理教学同学会、第21号（昭和56年、1月）からは天理大学宗教学科研究室である。／第2次世界大戦が終了すると、天理教では「復元」の声のもと、原典に拠った新しい教典が定められた。こうしたことから天理教教義研究の機運が高まり、道友社内に昭和24年10月天理教学同学会が設立された。同学会はその目的を、会則によると天理教学の研究とその発表とし、目的達成のため研究雑誌と図書を発行する、また研究会を開催するとうたっている。こうして誕生した研究雑誌が『天理教学研究』である。—中略—  
— 同学会会則にうたわれた研究会については、昭和41年から45年にかけて7回開催され、本誌第16から第20の各号にその紀要が掲載されている。—  
— 以下略—（『天理教事典第三版』P612）

正善の死後、10年間休刊し、編者が天理大学に移って再刊、現在は5年以上休刊しています。正善が発表を妨げていたとすれば、その死後は活発になるはずですが、そうなっていません。

私は岳東大教会で会った若い宗教学者の諸井慶徳氏の憂愁にみちた表情を、その後岡島氏に会ったとき話したところ、岡島氏が悲し気にその秘密を打明けたことを、想った。  
—天理教の教義や教学に関して、部内の者が研究発表をすることは、真柱様が喜ばないのです。それは真柱様の権限であるから、研究発表する者を、真柱様の権限を敢えて侵したとして、本能的に憎悪するようです。ですから、若い研究家は研究してもタブーだと言って発表しません。諸井君は素時らしい宗教学者であり、その研究を学界にも発表して高く評価されていますが（それはまた間接にお道のおいかけにもなっているのに）、それが真柱様に気に入らないのです。（『死の扉の前で』P81）

『天理教学研究』発行年  
(天理大学宗教学科に移行後)

号数	発行年	号数	発行年
21号	1981	33号	1985
22号	1982	34号	1996
23号	1983	35号	1987
24号	1985	36号	1998
25号	1986	37号	1999
26号	1987	38号	2000
27号	1988	39号	2002
28号	1989	40号	2003
29号	1990	41号	2005
30号	1991	42号	2006
31号	1992	43号	2009
32号	1994	44号	2012
		45号	2015

『天理教学研究』の発行時期	
1950(昭和25)	創刊、継続
1959(〃34) - 1963(〃38)	休刊
1964(〃39) - 1970(〃45)	発行、継続
1971(〃46) - 1980(〃55)	休刊
1981(〃56) - 2006(平成18)	ほぼ年1回発行
2007(平成19) - 2015(〃27)	3年に1回発行
2016(〃27)～	実質休刊

中山正善  
1967年死亡

## 正善の意に反することが行われている事例 正善の同意なしの展覧会と事情働きの青年を励ます正善

東京の銀座のデパートで開かれていた教祖伝関連の絵の展覧会について書かれています。ただ、教祖の絵はイメージが違うので展示させなかったとあり、展覧会そのものも、正善は反対であったような書き方がされています。正善が反対しても計画が実行されていく体制が本部内にはあったと考えてもいいのでしょうか。

次に書かれているのは、「事情働き」の話です。天理教内では教会長やその後継者が一般社会で働くのを「事情働き」とか言って嫌います。ところが正善は一般社会で働きたいという後継者を会社に入れ、わざわざその会社に立ち寄ってその青年を励ますのです。

教団が「事情働き」を嫌うのは、一度一般社会に出てしまうと、天理教に戻ってこなくなるとか、戻ってきても教内のカラーに染まらなくなるとか、いろいろあるのでしょうか。ただ、教内のことしか知らない人間ばかりの組織は、次第に衰退する、それが現在の天理教ではないでしょうか。

それから銀座に出て、展覧会場の百貨店の前を通ったが、展覧会の宣伝幕が大きく幾枚もさがって賑かであった。会場に堂本印象画伯に依嘱して描かせた教祖伝に関する日本画が十二点展示されていると、道友社の社員から聞いていたので、教祖の容貌が作品を書きながら私の頭のなかに自然に出来上がったものと、どう違うか興味があって、それを見たいと、真柱に話したところ、「こんな展覧会を開いて騒ぐよりも、『天理教原典集』を出版して、その普及をはかるべきなのに、困ったものだ、印象の教祖像はイメージが違うので、展示させなかった」と、吐き出すような不機嫌な答えだった。この展覧会も真柱の賛同なしに道友社で開催したのかと、私は不審に思ったが、真柱は運転手に命じて、丸ノ内に引き返させながら私に話した。

「或る教会の後継者で、優秀な天理大の卒業生が、×会社に就職しているのです。天理教をせよと周囲からきびしく命ぜられるが、どうしても社会で働きたいというので、社長に頼んで採用してもらったのですが……誰も彼も布教師にならなくても、神様に与えられた徳分（才能）を生かして、社会に奉仕すればいいのに、周囲が狭い考えを押しつけるので、本人も神様に申訳ないのではなかろうか、不安になることもあるようだから、まだ時間も早いし、社長に会って本人を励ましてやりましょう」

実際に会社に寄ったところ、社長は恐縮して迎えたが、真柱は社長に頼んで青年を応接室に呼んでもらい「どうだ、元気でやれよ。声をかけに寄ったが、安心したぞと、肩を叩いた。その時の青年の輝いた目を、私は忘れられないが……この真柱の態度は、賀川氏が言うように、私に示す特別な態度であったろうか、私にはそうと思えなかった。（『死の扉の前で』P80）」

この話を昭和26年のことだとすると、一神論で書かれている「天理教教典」出版後となります。ただ、教典講習会が地方でも行われたのは26年5月頃からで、まだ教内ではその内容は知られていなかったということになります。

(※昭和26年4月のこと)どんな話のきっかけからか、真柱が熱を帯びた声で話しているので、吃驚(びっくり)もし、襟を正したのです。／——確かに**天理教は一神教です**、多神教ではありません。教祖様に降りられた実の神は、宇宙を創り、人間を創り、生物を創り、あらゆるものを創り、これからも創りつづける絶対創造神です。それを人間に理解し易いように、言葉で月日だと説いたり、水、火、風と説いたりしたが、創造神、即ち親神です。日本人に解らせるために、十柱の神の名を挙げてその働きを説いたが、十柱の神様が存在するのではなくて、創造主、親神の働きを一つ一つ挙げて、それに**便宜的に神の名をつけたのに過ぎません**。敗戦後、日本人はアメリカから食糧といっしょに民主主義をもらって、有頂天になって喜んでいるけれど、親神は天保九年(1838年)からすでに、教祖を通じて説いているでしょう、**世界中の人間はみな一列兄弟**だと、それ故、仲よく助けあわなければならない、そしたら自然に、世界は平和になると。**人間には上下の区別はない**、みな可愛い神の子だと。また**人間には男松女松の区別もない**、男も女も神の前では同じ人間で差別はないと。それ故、夫婦の間で、どちらが偉いのもなく、たがいなたてあい助けあって、夫婦揃ってひのきしんのつもりで、家庭を治めれば、家は陽気暮しができて、幸せに栄えると、説いている。そしてすべての人が平等であり、みな神の可愛い子であるから、人を助ければ、神が喜んで不自由をさせない。食糧がなくて困るようなこともなく、他国から食い残した食糧をもらって喜ぶ必要もない。病まず、飢えず、幸せに百十五歳の寿命をいただいて、陽気にこの世においてもらえるのだ……

「これが復元の教理かと、僕も驚いたが、そばに仕えていた東井夫人が突然真柱に言ったのです。

一真柱さん、わたくしは小さい時から、耳に胼胝(たこ)ができるほど両親から教理を聞きましたが、こんなお話は聞いたことありません。／おれは真柱だぞ。お道については真柱の言うことが、正しいんだよ。／一天理教がお話のようならば、私でも信者になれます。

「そう〇先生が真柱へか、東井夫人へか、その二人に向ってともとれるように話したが、その時、真柱が顔色も蒼白で、血走った目を据えて酒を呷(あお)るように飲むのを見て、僕は息を呑んだものです。一体今の話は酒の上の話であるか、ほんとうに復元しての教理であるか、それとも半年前の僕の手紙への答えであるかと考えて一」

そこまで話した時、賀川氏が驚いたように、私の話をさえぎった。

「おかしいですなあ、私は敗戦直後から、うちの会長に仕えて、ご本部に常勤していますけれど、真柱様がそんな訓話をされたことなど、耳にしませんが一」／「僕も取材であちらへ行った時に、よく聞く真柱に関する私語や噂は、かんばんしくなくて、あんな風に真摯な態度の人とは、想像もしませんでしたよ」／「先生のようなお方の前では、そのように演技するのか、それとも神の代理者をしている日常が身についた演技で、先生方にお会いすると、人間に戻って酒にも酔い、心情を吐露するのでしょうか……先生、話をおとめして、すみません。どうぞ一」(『死の扉の前で』P57)

現行の『天理教教典』は「天理王命」の一神論を説き、『おふでさき註釈』は「月日両神」二神論で、戦前からの十神論も存続しているのが天理教の現状です。どうしてこうなってしまったのか、考える必要があるでしょう。

『天理教教典』（昭和24年、天理教教会本部）

親神を、天理王命とたたえて祈念し奉る。／ 紋型ないところから、人間世界を造り、永遠にかわることなく、万物に生命を授け、その時と所とを与えられる元の神・実の神にています。—中略—

親神は、元初りに当り、親しく、道具、雛型に入り込み、十全の守護をもつて、この世人間を造り、恆にかわることなく、身の内一切を貸して、その自由を守護し、又、生活の資料として、立毛をはじめとし、万一切を恵まれている。

その守護の理は、これに、神名を配して、説きわけられている。 — 十の神名の守護の説明 —

即ち、**親神天理王命の、この十全の守護**によつて、人間をはじめとし、万物は、皆、その生成を遂げている。

【おふでさき註釈（現行版）】

（6号）29-51、今までにない事ばかりを言い聞かせて、よろづたすけのよふきづとめを教える、このかぐらづとめの十人のつとめ人衆の中には、元創めた親神である月日両神の理を受けたものもいる。この**月日両神**が陽気ぐらしを見たい上から、人間世界創造を発意し、いざなぎのみこと、いざなみのみこと、を引き寄せて人間創造の守護を教えたのである。

【「おふでさき講習会録」第六号第一席。（『みちのとも』昭和3年11月20日号、P87）】

前述のやうに本号の御歌の中に『うを』『みい』『どちよ』等の御言葉が出て居りますが、尚聞かせて頂いて居りますところによれば、其他**十柱の神様のご守護**の理をわかり易くする為に、御教祖は『龍』とか『大蛇』とか、或は亀、鯨、鰻、鰈(かれい)、鰻(ふぐ)黒蛇(くろぐつな)等の所謂動物の名前を引合ひに出してお説き下さつて居ります。即ち月様たる國常立命は頭一つ尾一つの龍の姿であらせられ、日様たる足面命は頭は十二で、尾に三つの剣がある大蛇であらせられると御説き下されてゐます。又、國狭土命は亀、月読命は鯨、雲讀命は鰻、惶根命は鰈、大食天命は鰻、大苦命は黒蛇、伊弉諾命は『うを』伊弉冊命は『みい』の御姿を夫々されてゐるとお説き下されてゐます。そして各々共御姿の理より引いて其御守護の理をわかり易く御説き下されてゐるのでありまして、私達は之によつて判然(はっきり)**十柱の神々様の御守護の理**を悟らせて頂くことが出来るのでありますが、信仰其ものゝ本義を解してゐない人達、特にお道の『理』其ものゝ悟りに徹してゐない人達は、之を唯単なるトーテムの信仰のやうに考へる人があるのであります。

私は『教祖様』の出版について、岡島社長に相談することがあった。この作品を「天理時報」に連載して間もなく、完成の時には是非天理教の道友社から出版したいという申出であった。しかし、その後天理教本部で、「稿本天理教祖伝」を作成して、十日ばかり前にそれを真柱から贈って来た。翌年一月の七十年祭（※1956(昭和31)年）に、信者に下付するというのである。その完成した「稿本天理教祖伝」に目をとおして、私は『教祖様』を書きつづける熱情が冷えてしまった。というのは、「天理時報」に連載しているから、信者が読んでくれると期待したが、この毒にも薬にもならない清水のような「稿本天理教祖伝」が公式に信者に下付されれば、これが教祖の実体だと信じこんで、私の『教祖様』など一本にまとめても、読む信者はなかろうと考えられた。ただ私がここで『教祖様』を中止しないのは、私の作品として、一般の読者に読んでもらえることを期するからだが、道友社のような天理教の宣伝機関で出版しては、一般の読者の手にはいりにくいと考えられた。／ それ故、私は『教祖様』の出版について、道友社との約束を破棄したいと、簡単に岡島氏に話したが、岡島氏は急に顔色を変え、狼狽して言った。

「先生にも何か話した者がありますか。実は先生にお詫びしなければならないと、思っておりましたのに—」

何かあるのだと、不審に思って、岡島氏の顔を見上げた。

「実は本部で復元の一つとして編纂していた『稿本天理教祖伝』が完成して、七十年祭に信徒に配布することになって……そのあとで、各教区で講習会を開いて教祖伝を信徒に徹底させることに決定したから、先生の『教祖様』を道友社で発行するのを止めるようにと、申出がありまして—」／ 「それは却って有難いことですが—」

「先生の『教祖様』が単行本になれば、売れるにきまっているから、是非道友社で出すようにと言うので、先生にむりにお願いしたのに……今度は、講習会の妨げになるから出すななんて、言うのですから、全く非常識で、先生にあわす顔がありません—」

「教団というところは、どんな教団でも、身勝手なものですから……私の『教祖様』が講習会の妨げになるなら、『時報』の連載も、今すぐ中止してもいいですよ」／ 「先生、それは申ししていませんから、どうぞおつづけ下さい。毎週、先生の連載の出るのを待っている信徒が多いですから—」／ 「一体どなたがそんなことを言うのですか」／ **「真柱さんから何か言われたのではありませんかなあ—」**／ 私は他人事のようなこの言葉に不審を持った。／ 「直接岡島さんがそう聞きましたか」

「直接には聞きませんが……そう推測するのですが」

私は良心的な人だと信頼したが、この人もやはり教団の人かと、気落ちがした。私には真柱を批判するが、実際には誠意をもって真柱にぶつかることはせずに、**都合のわるいこととは何事も真柱の独裁の結果だとして、事なかれと過しているのではなかろうか。**

「解りました。それでは、『教祖様』の単行本は他社から出します」と答えたが、意地悪く加えてみた。「『時報』に連載をつづけるか否かは、私か真柱に直接うかがって、決定します」／ 「連載のことについては、本部でも何も申しませんから、先生、真柱さんにお話しになることはありませんよ……」（『死の扉の前で』P129）

「教祖様」は昭和三十四年の暮れに角川書店から出版されたが、発売一年半後に絶版にした。／ この作品は敗戦後二、三年して、なお社会の混乱しているころ、天理時報社の強引な依頼によって、二十四年から三十二年にかけて「天理時報」に連載したものである。尤も、書き出しには、資料難と資料探しの苦心をのべて、資料に関して読者の協力を求める切ない文章を、何回もつづけて、時報社をあわてさせたようである。／ 執筆することを約束してから、信じられないことだが、資料について、時報社も天理教本部も何等の協力をしなかった。天理教の真柱中山氏に頼む以外にないと判明したが、誰も引きあわせてくれる者がないために、やむなく紹介者もなく敢然と訪ねて懇願したところ、資料はないからと冷たく拒まれた。それならば、「教祖様」を書きようもなく、書く意欲も失なって、時報社長に辞退しようとしたが、その時の悲しい憤りは、すぐには胸におさまらなく、これは一体どういうわけか、両親が全財産と生涯をささげて、そのために、私は幼い時から孤児のように、地を這うようにして成長したが、その天理教というのは、こんなものだったか、この機会にきわめなければ、識ることはできないからと、思いなおして、よし、資料の援助がなくても、書いてみせるぞと、私は憤りから気おいたち、手探りのようにして資料を探した。そして、天理時報の「教祖様」の序章としてその資料探りの歎きを書きつづけて、その間、何ヵ月かかかって仄かに教祖像が見えて来たので、神がかりのあった天保九年十月二十六日から、初めて第一章として書いた。昭和三十四年に一本にまとめて角川書店から出版する時に、序章をすてて、その代りに、神がかりのあるまでの教祖の生活を書き加えて第一章とし、第一章以下をずらさせて、現在の「教祖様」にしたのだった。／ 天理時報に掲載した原稿は天理図書館に保存されていると聞くが、戦後は原稿は出版された後に、その所有権が著者にあるものとされているのだから、せめて序章の部分だけでも「芹沢文学館」に寄贈してもらえれば、私も再読できるのだが、三十年近く、あの序章は残念ながら読んでいない。

私が神がかりから書き出したことは、時の真柱氏の興味をひいたらしく、また私の執筆態度をよしとして、二年後二十六年の初夏にわざわざ戦災後仮寓していた陋屋（※ろうおく）に訪ねて来られて友情をもとめた。しかし、それでも、「教祖様」の資料の援助はなかったが、その後二年ばかりして、真柱自身が天理教の復元の一つとして、「稿本天理教祖伝」を編集していることを偶然知って、再び資料の援助を頼んで、多少資料らしいものを得たものの、私の心にすでに成っていたこの作品の構成を変えなければならぬようなものはなかった。ただ、その頃から真柱氏は教祖について語ることをたのしみにして、上京する時など、よく教会や料亭に私を呼び出したが、私も教祖や信仰について、遠慮のない意見を述べ、議論したものだ。しかし、三十二年にこの作品を書き終ると、私は信仰問題に興味を失なってその楽しい議論を自ら避けた。それで真柱氏との関係も終わったものと思ったが一

実は真柱氏との友情はその以後厚くなったようだ。一宗教の中心の柱とない信者にかこまれて、神の代理をすることが、個人にとってどんなに大変で難事であるか、氏の孤独な魂もわかったし、また、偉大な能力を持ちながら、周囲からは教団の専制君主のように敬されているだけで、理解されない純粹で、気の毒な人柄にも惹かれたからだった。／ この書物が単行本になって一年半ばかり後、真柱氏は何かの話の序で、天理教の「稿本天理教祖伝」を、各教会に朝夕読むようにすすめているが、教会によっては、「稿本天理教祖伝」の代りに、この「教祖様」を読むところがあるとて、困却しているようであったから、私は友情のしるしとして、出版社に話してこの書物を絶版にした。（『教祖様(再刊版)』「再版のいきさつ—中山正善・真柱の友情にちよってP1. 芹沢光治良. 1978. 善本社）

正善の死は突然だった。前日の夜まで、来訪者の接待をしていたという。それが翌日のテレビ放送のテロップで多くの天理教者はその死を知ることになりました。「重い糖尿病で、すでに視力も衰え、厳しい食餌療法を受けて」いたといっても、名医を擁する「憩いの家」と呼ぶ設備の完備した病院で治療を受けていたのに、なぜ・・・という疑問が湧いてきます。

正善が目指した「復元」はその死をもって挫折した、と言えるのではないのでしょうか。教祖の教えに戻れという復元は、幕末から続いてきた天理教の歴史をひっくり返すようなことなのです。ただ、自分たちの利益のために教祖中山みきを利用してきた人々のために、中山みきの教えそのものが消え去ってしまうのはあまりに悲しい。

四十二年の五月はじめの或る晴れた朝、思いがけなく真柱氏から電話で、「今日お別れに行くから、君の食べる昼食をご馳走してくれ」ということだった。お別れの意味が判らなかったが、青年に支えられ、門から階段をよろめきながら上って来た弱々しい姿を見た瞬間、これは大変だと、胸まで凍る思いがした。サロンに案内して休んでもらったところ、氏が重い糖尿病で、すでに視力も衰え、厳しい食餌療法を受けているけれど、普通食をとりながら、ゆっくり最後の別れをおしみたいということであった。

真柱氏は天理教本部に「憩いの家」と呼ぶ設備の完備した病院を経営し、多くの名医を擁して各専門で治療にあたらせているので、その管理のもとで、若い頃から柔道できたえた肉体が、これほど衰弱したとは、容易ならぬことだと、私は狼狽した。しかし、医者はどう言おうとも、氏は教祖を通じて親神の説いた教えの生きた代表者であり、しかも働き盛りであるのに、死ぬようなことがあってたまるものかと、私は胸をあつくして思いなおした。食餌療法など無視して、お好きな物を供しようと、近くで教会長をしている実妹に電話して調理方を頼み、フランスの旧友から贈られた古葡萄酒を抜いて、喜んでもらい、かつ、病気を克服してもらうために、その病気によって神が何を氏に求めているか、こころに問い、神の啓示に従うようにと、私は真剣に語った。その私の天理教的発想法による忠告に、最初驚いたようであったが、すなおに聴いてくれた。そんなわけで、その日、友としてただ二人、数時間ゆっくり語りあって別れた。

実はその日、私は初めてこの人をわが親友のなかに加えて、それから毎日この親友の健康のために祈ったものだ。ところが、元氣だと電話をくれて安心していると、その年の十一月十四日急死したと、知らされた。その死を私は、信じられなかった。生きてもらいたかったのだ。今死んではならないと思ったのだった。葬儀にも行かなかった。求められても追悼文も書かなかった。親友として生きていたかと思っていたかった。

それから二年たって、四十四年の秋、やはり亡くなったのだと、悲しいけれど納得して、天理市におもむいて墓参をし、天理教の祖霊殿にも詣って、これで完全に天理教とも縁がきれたものと思って、私は天理市を去った。（『教祖様(再刊版)』「再版のいきさつ」P4）